

季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第67号 2025年 1月

今月の
ベストドクター

松江赤十字病院
呼吸器外科
低侵襲手術センター長

中村 廣繁

General Thoracic
Surgery
H. Nakamura

肺がんなどの呼吸器疾患における 低侵襲治療の発展に尽力

近年、患者数が増加している肺がんをはじめ、重篤な症状を引き起こしやすい呼吸器疾患。胸腔鏡手術や呼吸器外科分野でのロボット手術の発展と普及に貢献してきた中村廣繁先生に、治療の現状やご自身の医療に対する哲学などを伺った。



松江赤十字病院
呼吸器外科
低侵襲手術センター長

中村 廣繁 なかむら・ひろしげ

1984年鳥取大学医学部医学科卒業。88年同医学研究科博士課程修了。鳥取県立中央病院心臓血管呼吸器外科、国立浜田病院外科、国立米子病院外科を経て、91年より鳥取大学医学部附属病院第二外科、98年米国ワシントン州立大学留学、98年鳥取大学医学部附属病院第二外科講師、2001年国立米子病院呼吸器外科医長、04年国立病院機構米子医療センター外科系診療部長を歴任。05年から鳥取大学医学部附属病院胸部外科科長・准教授を務め、13年胸部外科学分野教授。15年シミュレーションセンター長、副学部長、21年医学部長に就任。24年には名誉教授に。同年、松江赤十字病院呼吸器外科低侵襲手術センター長に就任。

日本外科学会認定医 指導医、呼吸器外科専門医、日本呼吸器外科学会 指導医、胸腔鏡安全技術認定医、日本呼吸器外科学会ロボット支援手術プロクター、日本医師会認定産業医、医学博士、臨床研修指導医。著書に『呼吸器外科ロボット支援手術～達人への道～』（メジカルビュー社）がある。

確定診断が難しい呼吸器疾患

高齢化が急速に進んでいる日本では、肺がんをはじめ、肺炎、肺気腫、間質性肺炎などの呼吸器疾患が増えている。若い世代に発生しやすい気胸や多汗症なども呼吸器外科の対象疾患だ。

「呼吸器疾患は増加傾向にありますが、画像所見だけではなかなか確定診断できないのが難しいところですね。肺という臓器の特性上、内視鏡などで直接視く検査が容易ではありません。そのため、X線、CT、MRIなどを駆使して異常が見つかったも、良性か悪性

かの判断が極めて困難なことがあります」。そう語るのは、呼吸器外科全般の疾病を担当し、胸腔鏡手術やロボット手術のスペシャリストである中村廣繁先生。腫瘍がだんだん大きくなっていく、もしくは形がいびつになっていくなどの変化があると肺がんが疑われる。そのため、経過を慎重に見ていくことが重要だ。「一方で、漫然と経過を見過ぎて症状が進行してしまう恐れがあるので、総合的に判断して早めに外科治療を選択することもあります」

近年では、有害物質、生活環境、ストレスなどによって、ドライバー遺伝子に変異が生じたために発症するケースが増えている。

「一口に肺がんといってもさまざまです。たばこを吸わない女性がかかる肺腺がんの約5割は、EGFRという遺伝子の変異が原因といわれています。どの遺伝子に関係しているかで悪性度などの特徴が異なり、治療法も違ってくるのです」

患者さん一人一人に合った治療を重視

2024年で医師になって40年を迎えた中村先生は、医療技術の飛躍的な発展を間近で見ながら、常に最先端の技術を身につけてきた。近年の肺がんの治療法は著しく進歩し、専門化しているという。「最近では、手術と薬物療法、放射線療法などを組み合わせて治療を進めるのが基本となっています」

患者さんの病態に応じた治療を行うために、中村先生のチームでは、まず、特徴を詳細に調べてカンサーボードで議論し、エビデンスに基づいた治療方針を決定する。患者さん一人一人に合った最善の治療を模索し、それを十分に説明したうえで、患者さんの希望に寄り添う治療法を選択することが肝要だからだ。その際、患者さんの家族や親族にも、治療方針をしっかり理解してもらう必要がある。医療従事者の知識や技量の不足で、患者さん自身が望む治療が受けられない——そんなことがないよう、セカンドオピニオン外来や適切な情報提供も重要だと考えている。

腫瘍が見つかって、小さく発育が遅いものなら経過を見る場合もあり、「手術で取り除かなくてもいい、

“あの世まで持って行けるがん”もあるんですよ」と話して手術を勧めないこともある。胸腔鏡を使った低侵襲の手術も広く行われており、そうした手術では体への負担が少なく、呼吸機能も温存できる。

「退院時の患者さんの笑顔を見ることが最大の喜びです」。そのために患者さんの病状に応じた治療法、手術術式の選択を行うことはやりがいの一つでもある。

ダビンチを呼吸器外科に導入 保険適用までの働きかけも

手術支援ロボットを早い段階から呼吸器外科に導入したことも、中村先生の功績の一つだ。2010年秋、鳥取大学にダビンチが導入され、翌2011年には米国アラバマ大学でダビンチ手術の認定ライセンスを取得。そして、胸腺腫合併重症筋無力症に対する胸腺摘出術と肺がんに対する肺葉切除に成功した。

「ライセンス取得後はダビンチトレーナーという機器操作を習熟するためのシミュレーターを用いて、平日の時間外や休日を利用して猛烈に練習しました。トレーナーの評価で満点が出るようになり、それが自信になりましたね」

中村先生は、ロボット支援手術に多面的に関与し、その貢献も際立っている。2018年の肺がんに対するロボット支援手術の保険適用にも深く関わった。また、独自に開発した「鳥取大学式ダブルバイポーラテクニック」は、ロボット支援手術のメリットが最大限に発揮できる優れた手法だ。

「ロボット手術では、3本のアームと1本の内視鏡の合計4本を一人の術者が自由に操ります。このメリットを活かすには、左右の手で同様の操作ができることが大切です。習熟すると、剥離組織に鉗子で適切な緊張をかける精緻な操作が可能になり、効率性、安全性の高い手術ができるようになります」

呼吸器外科の手術では、軽微なミスでも重篤な状態になってしまうことがある。特に、肺は血流が豊富なこと、肺動脈の血管壁が人体で最も脆弱であること、術野に心拍動が伝わることなど特殊な環境のため、予期せぬ出血などのリスクが高い。



患者さん一人一人に向き合い、最善の治療を提供する

「触覚のないロボット手術では、鉗子によるけん引力の強さ、患者さんから離れての遠隔操作が懸念点でした。しかし実際には、3Dの鮮明な拡大視野のもとで精緻な操作が可能で、難易度の高い手術でさえ容易にしてくれることがわかってきました」

先生は、中国地方で初めて鳥取大学にダビンチが導入された際、立ち上げから関わって専門としてきた。この経験を活かして、松江赤十字病院でもスムーズな運用に繋がっていきたいと考えている。

「ダビンチを使うと術後の合併症が少ない、回復が早い、入院期間も短くなるなどメリットが多いです。また、手術の精度が高いため予後が良好で再発も少ない。ここまでメリットが多いと、ダビンチのある病院に患者さんが集まってくるわけです。若手にとっては手術のストレスが少なく、ベテランにとっては視力の衰えや手の震えを補正してくれ、外科医としての寿命を延ばしてくれます。さらに、AIのサポートにより、自分の成長曲線が可視化できて自己研鑽にも繋がる面も見逃せません」

外科医療の発展を考えたとき、ダビンチのような手術支援ロボットは、なくてはならないものになったといえる。

心のロウソクに火を灯す

長年にわたり、さまざまな組織や部門のトップとしてメンバーをけん引してきた中村先生。信頼される



ドクターや病棟看護師とのカンファレンスの様子（写真提供：松江赤十字病院 呼吸器外科）

リーダーとして、方向性を示すリーダーシップ、計画を立てて部下を気遣い実行するフォロワーシップ、調整してまとめるコーディネーターシップの3点を心がけてきたと話す。

「みんなの意見に耳を傾け、臨機応変に対応し、発信力をもって指揮を執るようにしました。よきリーダーは強引であったり、我田引水であったりしてはならず、公平で働きやすい環境を整える必要があるからです」

人材育成の重要性を考え、教育にも力を入れてきた。後進には、患者さんの背景を踏まえた治療をしてもらうため、名言とされる「病気を診ずして病人を診よ」と伝えてきた。ドクターの養成には、豊かな人間性や創造性を育むことが必要との考えからだ。

「学生に対しては一方通行にならないように、彼らの反応を見ながら授業を行うようにしています。やってほしいことを押し付けるのではなく、『おもしろそう』『やってみたい』と思わせることが大切。やる気を引き出し、心のロウソクに火を灯すことができるかどうかです」

指導者として、部下の成長を見ることにやりがいを感じ、一人一人に対応した指導方法を考えることが楽しみとも話す。例えば、医師には臨床医以外の選択肢もある。若手の意向を聞いて、できるだけそれに沿うように、そして個性を生かせるような指導を心がけている。そうした指導のもと、部下が成長していく過程を見られるのはとても喜ばしい。「手術の上達はもちろん、患者さんへの説明の仕方、学会発表や論文作成など、第三者からお褒めの言葉をいただいたときは、どんな些細なことでもうれしいですね」と笑顔で語る。

また、年齢を重ねるにつれて、自分のやってきたこと、いわば「魂」といえるものを残していくことが大事だと考えるようになった。先生の熱心な教育活動は、学会など、学内を超えたさまざまな活動を通じて評価されている。

「今の目標は、これまでの呼吸器外科医としての経験を活かし、それを若手に伝えること。そして、病院に自分を活用してもらうことで地域医療を守り、発展させることです」



胸腔鏡を使用している巨大な悪性胸膜腫瘍切除術（写真右側が中村先生）。低侵襲で患者さんへの負担が少ない

人に喜んでもらいたい気持ちから 目指した医師への道

人材育成に対する考えからもわかるように、先生はかなり世話好きな性格だ。医師を志したきっかけも、人に喜んでもらいたいという思いが強かったから。「喜んでもらうなら、病気を治すことに優るものはないと考え、医師の中でも治療医になりたいと思いました。特に、外科は自らの技量で治療できる魅力がありますし、手塚治虫の『ブラックジャック』の影響も大きいと思います。また、命に関わる病気から患者さんを救うために全身が診たかったので、重要な臓器である心臓や肺に興味を持ちました」

先生はその過程で、将来、最大の問題となるだろうといわれていたがんの治療、中でも著しい増加が予想されていた肺がんに関心を抱いたという。「肺は多彩な疾患があると同時に全身の病を映し出す鏡ともいわれ、がんの転移も多いなどさまざまな疾患の影響を受けることが知られています。この難敵に挑みたいという気持ちが強くありましたね」

もう一つ、個人的な背景もあった。

「3歳の時に、左前腕に重度の火傷を負ったことがあるんです。高校生の時の学校健診で、その火傷跡を見た医師に『将来、皮膚がんになるかもしれないよ』と言われ、かなりショックを受けました。しかし同時に、幼い頃に火傷を負い医学の道に進んだ野口英世先生のことを意識し、自分もそうなりたいと考えるようになったのです」

日米のモリ教授にあこがれて

鳥取大学医学部を卒業後、附属病院の第二外科に入局した中村先生が指導を受けたのが、心臓外科医の森透教授（当時）だ。中村先生は学生時代、バスケットボール部に所属しキャプテンを務めていたが、その顧問が当時から尊敬していた森教授だった。

「森教授とはこんなエピソードがあります。手術の指導をしていただいていた頃、患者さんの大血管から出血したことがありました。私は出血に動揺して手が動かせなくなり、頭が真っ白に。その際教授に『どん

な手術でも終わりの時間はくるんだよ』と言われまして。その一言で動揺が収まり、冷静に止血できて無事に手術が完了しました。外科医には冷静な判断力が必要だと痛感した、忘れられない出来事です」

文部省（現文部科学省）の在外研究員として留学したときには、ワシントン州立大学で胸部外科のWood教授（当時）の手術を見て感銘を受けた。

「無駄がなく正確な手術手技が特徴で、難しい手術を容易に見せる技術に驚いたのを覚えています。また、いつでも冷静沈着な人柄が手術にも表れており、自分もそうなりたと思いました。効率の良い手術室の運用にも感心させられ、手術体位の取り方から手術手技、外来でのインフォームドコンセントの仕方まで、そのときに学んだことを全て自分の臨床技術に取り入れ、活かしています」

外科医の心得として「鬼手仏心」という言葉がある。外見は怖そうでも内面には仏のような心が宿っている様子を表す「鬼面仏心」から派生したものだ。

「慈悲深い仏心があるからこそ、冷静にメスを入れる鬼手が価値あるものとなります。手術前には患者さんの背景を考えて術式をベストチョイスして最善を尽くしたいと思っていますし、術中の判断も重要です。常に最新の知識と技量をアップデートする必要がありますね」

森教授とWood教授（日米2人のモリ教授）は、まさに鬼手仏心を体現した人物であり、あこがれの存在だ。

医師に求められる4つのH

人の命に関わる以上は、自己研鑽が欠かせない。医療は人を相手にするため、心（マインド）が大切だ。

「医師には知識（Head）・技術（Hand）・心（Heart）の3つのHを兼ね備えることが求められる——この『3H』という言葉は、20年以上前に勤務していた米子医療センターで当時の院長からお聞きしたものです。とても印象的だったので自分でも一生懸命調べて、特に医療従事者には的を射た言葉だと感じました。なかでも仁、慈、義の心、いろいろなことに負けない



手術室スタッフとの勉強会（写真提供：松江赤十字病院呼吸器外科）

タフな心が大切です。私はさらに4つ目のHとしてHospitality、思いやりとおもてなしの気持ちを持つ医師になりたいとも思っています」

常に多くの仕事を精力的にこなしている先生にとって、「仕事を追え、仕事に追われるな」という言葉も、自ら進んで前向きな気持ちで働くための原動力となっている。

「この言葉は、アメリカの政治家で物理学者でもあるベンジャミン・フランクリンの格言です。何事も気持ち次第。やらされていると思っている間は不満も多く、楽しく良い仕事はできません。自ら選んだ道であるからには、前向きに仕事を追いかける気持ちを持ってこそ、良い成果が出せると思っています。それがチャレンジ精神や進取の気性（積極的に新しい物事に取り組もうとする気質や性格）にも通じるでしょう」

「一日一生」も好きな言葉の一つだ。「朝は希望を持って目覚め、昼は懸命に働き、夜は感謝とともに眠る」という意味の言葉ですが、『今日はこれをやるぞ』と決めて実行することが大事。明日どうなるかわからないですから、今を大事にして生きていかなければと思っています」

地元愛と反骨心が原動力に

松江市は山陰の中では最も人口が多く、歴史と文化に恵まれた国際的な観光都市だ。先生は、松江市民が約30km離れた米子市の鳥取大学や出雲市の島根大学

まで行かなくても、松江市内で最先端の医療が受けられる体制を整えていきたいという。

「私は鳥取で生まれ育ったことで、地元愛とともに都会の人たちに負けたくないという反骨心も人一倍強くなりました。その思いが進取の気性を生み、何事にも挑戦していこうというチャレンジ精神に繋がっていると自負しています」

好奇心旺盛で、医師としても新しいことへの挑戦を繰り返してきた先生。休日はゴルフやスポーツ観戦、映画・音楽・ミュージカル鑑賞、旅行、料理など、さまざまな趣味を楽しんでいる。

「スポーツは何でも好きですが、松江市をホームタウンとするプロバスケットボールチーム『島根スサノオマジック』を応援しているほか、プロ野球では阪神タイガースのファンで大阪まで観戦にも行きます。1年ほど前からは独学でピアノを始めました。右手と左手が別人格のように違う動きをしながら足でペダルを



ご自身の著書、先生の論文が載った書籍など

踏むところは、ダヴィンチの操作に重なるものがあるのです。いずれは、空港などにあるストリートピアノをさりげなく弾けるようになりたいですね」

朗らかに話されているのを伺っていると、公私ともに充実している様子が目に浮かんだ。これからも先生は、前向きに挑戦を重ねていくだろう。🌐



手術室看護師と呼吸器外科スタッフ。中村先生を筆頭に、松江市の医療体制の充実に尽力する

お知らせ

日本におけるベストドクターズ®・サービスは日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● 株式会社法研 (ベストドクターズ・サービス日本総代理店)

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。

永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。



● ベストドクターズ事業

ハーバード大学医学部教授により1989年に創業したベストドクターズ社のもと開始、2002年に日本に進出した事業です。現在は、2017年に合併した米テラドックヘルス社のもと鋭意展開されています。テラドックヘルスは、一般的な医療相談から重篤疾患、身体疾患からメンタルヘルスにいたる一般向けサービスのほか、医療機関向けのデバイスまで幅広い仮想ヘルスケアソリューションを提供する、ニューヨーク証券取引所上場企業です。日本では、「ベストな医師＝Best Doctors in Japan」のご照会を柱とした各種サービスのほか、医療機関向けデバイスを提供しています。

ベストドクターズ記念盾

ご選出記念盾に関するお問い合わせが増え個別のご対応が難しくなりましたため、本誌にて概要をご案内させていただきます。お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。

なお、2022年5月1日お承り分より新デザイン（右下の画像に準じたデザイン）にリニューアルしております。材質に変更はございません。また、従前どおり、過去のご選出年度（2022-2023、2020-2021、2018-2019、2016-2017、2014-2015、2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）でもお承り可能です。過去の選出年度の盾も、新デザインになります。

記念盾はオーダーメイドの性質上、注文主様・送付先様のご都合による返品・交換・ご注文後のキャンセルはお受けできません。あらかじめご理解の上ご注文いただきますようお願いいたします。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg

【価格】34,000円（送料込・税別）

【納期】お申し込み後8週間程度

氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「Prof.」「M.D.,Ph.D.」等からご選択いただけます。

e-mail : tate@bestdoctors.jp (bestdoctorsには末尾に「s」がつきます)



本誌『BEST DOCTORS IN JAPAN』のバックナンバーがご覧いただけます。 <https://bestdoctors.com/japan/newsletters/>

Teladoc
HEALTH

 **Best Doctors**

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、複製、転載することは禁じられています。

日本総代理店 株式会社 法研

〒104-8104 東京都中央区銀座1-10-1 Tel.03(3562)8404

<https://www.sociohealth.co.jp/>

<https://bestdoctors.com/japan/>

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japanは、米国およびその他の国におけるBest Doctors, Inc. の商標です。Best Doctors, Inc. は、Teladoc Health, Inc. およびTeladoc Health International, S.A.U.の一員です。Teladoc Health、Teladoc および TeladocロゴはTeladoc Health, Inc. の商標です。